

憲法はじめの一歩

もうひとつの「日中韓平和絵本」

～『花ばあば』と『草』

出版社「ころから」代表 木瀬貴吉さん

2013年に「ころから」を立ち上げた。

新大久保で毎週毎週ヘイトスピーチが繰り返される状況に驚きと憤りを感じ、抗議する行動に参加するようになった。

その後、関東大震災での朝鮮人虐殺の加藤直樹さんの本『九月、東京の路上で』を出し、『花ばあば』のように韓国の翻訳本の出版が持ち込まれるようになった。

世の中が右傾化していく中、世相に流されながらも抗いつつ今に至っている。今日は『花ばあば』出版に至る経緯を中心にお話します。



『花ばあば』をめぐる略年表

- 2004年 日本の絵本作家4人（田島征三、田畠精一、浜田桂子、和歌山静子=50音順）が中国、韓国の作家へ「共同制作」を呼びかけ
- 2006年 日中韓の12人の作家が「平和」をテーマに制作し、日中韓の各出版社が同時発売する概要を決定。日本は童心社が手をあげる
- 2010年 韓国で『花ばあば（コッタルモニ）』（初版）が刊行
- 2012年 童心社がさらなる改訂を求めて、刊行せず
- 2015年 韓国と中国で改訂版の『花ばあば（コッタルモニ・花奶奶）』を刊行
- 2017年 田島、浜田両氏が「ころから」と接触
- 2018年 クラウドファンディング成立（202人から188万円の支援）
『花ばあば』刊行 クォン・ユンドクさん来日
- 2019年 2刷
- 2022年 3刷 これまで6500冊刊行

『花ばあば』刊行のいきさつ

DVD『わたしの描きたいこと』は、作者クォン・ユンドクさんがどういう手法で描いているか、12回くらい描き直した経緯が描かれているが、最終的に「2012年に日本では刊行されませんでした」で終わっている。その後、2018年に「ころから」で刊行した。

「日中韓平和絵本」は

田島さん・浜田さんの話—加害国から呼びかけたことに意義がある。

浜田さんの話—絵本作家が呼びかけ、童心社が手をあげたことが重要。

12人それぞれの作家がテーマ性を持って制作にとりかかった。

クォン・ユンドクさんは「日本軍慰安婦」をテーマに選び、2012年に韓国版の『コッタルモニ』初版を刊行した。

・・日本での刊行にあたって、慰安所のページに天皇の肖像画「御真影」を掲げた絵など、童心社から「やめてほしい」との依頼。その後も更なる改訂が求められ、刊行が中止に。折衝は続き、2015年に改訂版が出され、中国で刊行。

2か所の改訂

- ・連れ去られるシーン、男性の服に軍人を示す☆のマークがついていた。
朝鮮で慰安婦を斡旋していたのは軍ではなく村役場の人たちだった。
誤解を招かないようにと☆マークがなくなった。
- ・連れていかれたシーンで「ここ台湾だった」という言葉—植民地朝鮮から植民地台湾に連れていかれたことはないという研究者の指摘で削除（後日、そのような事例があると判明）
- ・それでも童心社では刊行できないとのことで、田島征三さん・浜田桂子さんによって新たな出版社探し始まった。共通の知人を通じて2017年に「ころから」に話が持ち掛けられた。

田島さん、浜田さんと木瀬さんの会話

絵本業界のつながりで童心社への遠慮もあって難しい・・

- ・「絵本」をやったことがなくて、右翼にびびらない出版社→ころから

童心社の言い分・・史実に基づかない部分がある

・田島さんは、絵本は史実をもとにした「フィクション」

→事実じゃないと指摘された p7(軍服)一軍人が斡旋した事実はない
とされ修正した。p13(青いすみれ)は、花ばあばが初めて性暴力を受けた
シーンの「青いすみれ」はまさにフィクションだが、誰も指摘しなかった。
この本の本質を誰も見てくれないという田島さんのいら立ち。

・・意気投合して、ぜひ出そうということになった。

条件として、日本の市民運動をしている人たち、特に「wam 女たちの
戦争と平和資料館」の渡辺美奈さんとか、何十年も日本軍慰安婦の問題
を告発して伝えようとしてきた人たちが、この絵本をどう思っているか
聞いて回り、もし、その人たちの中で「あの絵本は問題があって、出す
のはよした方がいい」という人が一人でもいれば諦める。その方たちの
支援なしには売れるわけもないと思った。・・6人くらいの方にお会いし
たところ、異口同音に「ぜひ、出してください」「出ないのはおかしい」
と全員が言ってくださった。それで出すことを決意。

後日、「右翼からの攻撃は怖くなかったですか」という質問に、田島さ
んが答えて「怖いのは右翼じゃない。反響のことだ」と。

田島さん・浜田さんの協力を得て刊行。

絵本の解釈について

・技法 絵のにじみ 韓紙・・6層の
紙に絵の具で描いてにじみがでる。

・p13 - 14 (顔のない軍服) おどろおど
ろしいと言われた絵を書き直し。
日本軍に限定せず、顔は入れ替わ
る。うわべの規律と下半身の対比。

・p35 - 36 (解き放つ花) 助けてもらうだけの人物ではなく、受け取った
ものをもう一度社会に解き放ち、返す。韓国語では「ストレス」は「発
散」しないで「解く=ほぐす、解き放つ」もの。



翻訳にあたって

原題は「コッタルモニ」(花+ハルモニ=花おばあさん)

原作者からの“クレーム”

→日本では「ハルモニ=日本軍「慰安婦」との理解が広まっている。

しかし本来は「ハルモニ」にそうした意味はない。

→どこにでもいる「おばあちゃん」がかつて被害にあったことを示してほしい。

・・花ばあさん、花ばあちゃん、と検討し、中国版『花奶奶ないない』の「奶奶」は「ばあば」という感じということから『花ばあば』に決定。クォン・ユンドクさんに「ばあば」が受け入れられるか心配したが、翻訳者の桑畠さんが「ばばあ」と「ばあば」は別物と丁寧に説明して了解を得た。どこにでもいるおばあちゃんがかつて被害にあった、時と場合によっては加害者・被害者が入れ替わる普遍的な物語としてのおばあちゃん、自分のおばあちゃんが体験したら?といった意味でも日本の子どもたちに知ってもらえたると『花ばあば』というタイトルにした。

6500 冊刊行。

その後、いろいろな持ち込みがあって

『草』の刊行について 日本軍「慰安婦」のリビング・ヒストリー
翻訳者・都築寿美枝さんより声掛けがあり、刊行。

キム・ジェンドリ・グムスク作 都築寿美枝・李玲京(りょんぎょん)訳

・日本の市民運動の成果

『花ばあば』も大きい本屋さんでは売ってくれず、全国の小さい本屋さん（赤羽の「青猫書房」富山の「プウ横丁」）等でたくさん販売。DVD『わたしの描きたいこと』全国50か所以上で自主上映会を開き販売。その積み重ねがあって、この話があった。

・クラウドファンディング→288人、318万円集まり刊行。

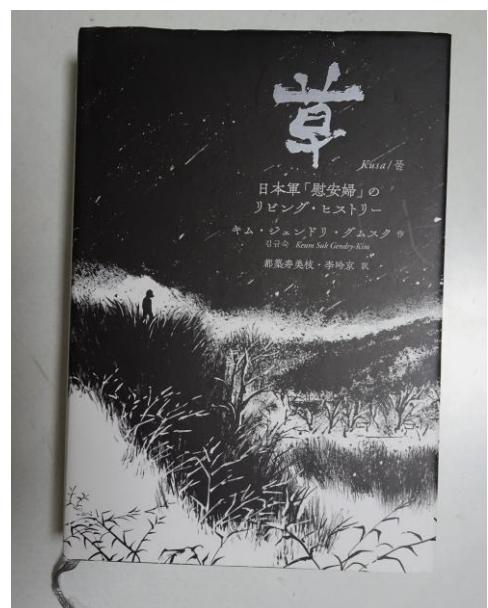
・カバー絵について

チマチョゴリの少女の絵の表紙（韓国語版）を変えたいと申し入れた。

この表紙では日韓の問題を表しているが、もっと広い視野で描かれている。植民地支配の下では、最も弱いものが犠牲になる。日本軍慰安婦がテーマだが、植民地支配がなければこのような事態にはならなかつた。戦時性暴力だが、植民地支配の下、もうけた大人たちがいた。女性や子どもたちは利益を受けることはなく、右翼は「韓国朝鮮にいっぱい学校を建てた、近代化に寄与した」と言うが、女の子は学校に行けていない。植民地支配に役に立つ男を育てるための学校だった。役に立たないと見られた女の子は、慰安婦となつたり日本に働きに来たりした。植民地支配の痛みが、この表紙では読み取れないのでないかと申し入れた。

作者はあっさり承諾。作者が来日した時「どうして韓国語版と日本語版で表紙が違うのか」と質問を受け、今の内容を説明したが、作者は「ころからの意見に全面的に賛同します」「実は、この絵は韓国の出版社にどうしても描いてくれと言われて描き、登場しない子（慰安婦とされた少女の象徴的な絵）で腑に落ちなかつたが「出版のために必須」だと言われて仕方なく描いた。この作品の中に現れる絵を使っていただき、私は全面的に賛同します」と話してくださいました。

慰安婦問題を語る時「少女たちが」という言い方があるが、何歳であろうとこんな被害を受けるべきではない。アメリカの性犯罪に関するレポートでもレイプに年齢は関係ないという統計が出ていて、若い女性に象徴させることには違和感があった。ここでは植民地支配が終わった後も、この女性がいかに辛酸をなめ続けたかが描かれている。慰安所にいた時が地獄だったのは間違いないが、その後の50年は安泰だったかというとそうじゃないーということが描かれている。年齢に関係なく性被害は続く、起きるものだと、作者と話し合えたいい機会だったし、こういう本にしてよかったです。



ぜひ伝えたいこと

当初、2017年ころは憤りを持っていた。童心社は最初から出すと言わなきやよかったですじゃないか。浜田桂子さんは、絵本作家が呼びかけ童心社が乗っかけてきて、その逆ではないーという話だった。

出せない理由として、枝葉末節と思えるところを理由に刊行しない。伝統のある絵本出版社としての見識はどうなのかなと思った。

出版して、読書会など開くうちに、果たして童心社は、この本を「出さなかったのか」「出せなかったのか」というところに、今の日本社会の問題があるのでないかと考えた。

童心社では、実際に子どもたちにリサーチしようと、中高生にどう受け入れられるか拒絶反応があるか、リサーチしようということになって、韓国から作家・編集者を招き、私立・公立の学校で、実際に本の読み聞かせをして、生徒・保護者から意見を聴いた。

1つの本に関して、これだけのことをやった。招くのにお金も掛かるし、学校・教育委員会との折衝等ものすごい労力をかけた。担当している編集者は何とか出したいと思った。一方で、おそらく上の方、社長クラスの方でものすごい懸念が広がった。2012年ごろは、竹島・独島の問題などで、嫌韓・反韓が広がった時期で、学校でのリサーチなど童心社だからこそできたことで、そこまでやったのに出なかった。

童心社は「出さなかった」のか「出せなかった」のか？

皆さんと一緒に考えていきたい。

田畠精一さんはドキュメンタリーの中でおっしゃっている。

・・この本は出して終わりではない。それでは全く売れない。日本のメディアを中心にして、この本を応援していく、市民の力で支えていくことが重要だ。

一出すことが目的ではなく、そこからがスタートだというお話で、2019年に増刷、2022年に3刷ということで、市民社会の責任を果たしているのではないか。

(まとめ・市川まり子)



2025.4.17 木瀬さんと憲法はじめの一歩の皆さん